

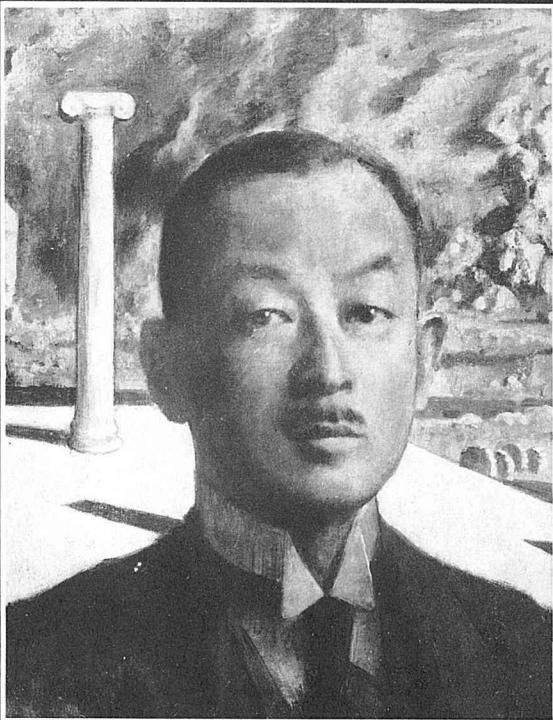
故文學博士

深田康算氏肖像

病床絶筆

Ὁ βίος βίος,
βίος ἀβίωτος.

Υ. Fukada



哲學研究

第一百五十五號

第十四卷
第二册

アミエルの日記の一節

故深 田 康 算

文學なるものは誠に斷片の又斷片に過ぎぬとも云へます。人の語り行ひ又公にした所のもの、其等所謂『事實』として世に傳へられるものが吾々の生活の全部では決してないこと、若くは時としては其核心でさへもありはしないと云ふことは、不思議な偶然の力に依つて、公表を全く目的としなかつた日記類などの發見されるやうな場合に特に吾々の注意に上ります。『あゝさうであつたのか』それが吾々人間の智慧の極致です。云はゞ吾々の生きてゐる世界は、吾々のお互に知り合つてゐる世界よりも遙かに遙かに大きく廣くさうして又深い。吾々がお互に何處まで行つても相互に永久に他人なのではないかと云ふ恐ろしい疑ひも此處から來るのでせう。云はゞ人の魂を、人のさういふ内部生活を、そして實にあゝ云ふ一種の性格の内側を、吾々に默示するものとしてアミエルの『日記』(ジュール・アンチム)などは數多

くの日記類書翰集乃至自叙傳懺悔錄等の中でも、殊に興味多きもの思はれます。數日前私は再び此書を手にとつて偶然九月二十日の條の上に目を落しました。

其處には次の様な感想が述べられてゐます。(一八六六年九月二十日、即ちアミエルが四十五歳の頃です。御承知でせうが彼は瑞西ジエネヴ大學の教授で美學などを講義した人であります。しかし彼の名前が後に残るのは、唯其歿後に發見された『日記』のためばかりなのです。一八二二年生、一八八一年歿。

『私の昔の友達等は恐らく私に對して不満を感じてゐることだらう。私が何の仕事も仕上げず、彼等の期待を裏切り、彼等の希望を満たさぬことを彼等はたしかに不満足に思つてゐるのである。私自身だつても亦不満を感じてゐるのだ。しかし心の底から私に自信を與へて呉れる所のものを私には捉へることができない。私の心はいつも日常の些細な事や無駄話や其時其時の氣晴らしなどに引ずられてゐる。希望なんかもない、氣力なんかもない、確信なんかもなく決心なんかもありはしない。私は唯絶望的憂鬱と退嬰的靜寂との間を去來してゐる許りである。勿論私は讀書もする、人と語りもする講義もする又筆も執る。しかしそれが何の役に立たう。私は夢遊病者の如くにそれをしてゐるに過ぎぬ。靜寂主義的な私の性情は私から自

主獨行の力を奪ひ努力精進の心を消滅せしめる、自己に對する不信任は慾望を殺し去る。私の常住陥つて行く所のものには内に向けられたる懷疑、そのみである。私の愛する所のものは眞面目より外ないのに、私は私の境遇を、加之私自身をさへをも、眞面目に取扱ふことができないのである。私自身の個性、私自身の能力及び私自身の志望をば私は自ら高く買ふことができない。美しきもの氣高きものゝ名に於て常に私自身をば見下してゐる。一言にして云へば、私は私自身の中に自己を永遠に嘲罵する所の者を抱へてゐる。それがために自分は遂に躍進することができないのである。——今夜はシャルル・エーンと暮した。彼は正直者であるから、私の文學上の仕事に對して御世辭にも賞讃を述べらるやうなことをしなかつた。私は彼を愛し又敬してゐる故に彼を恕してやる。しかし、勿論自尊心から云ふことでは決してないが、公平な友人から尊敬を受けることは私には如何ばかり嬉しいことであらう。沈黙のうち非難されてゐるのを感じるのは堪へがたき苦痛である。私も彼及びシエレーを満足させるやうな書物を書くやうに努めなければならぬ。』と思ふ。

かう云ふ箇處を讀むと私は夜深に唯一人となつて自己の心を見つめながら自己解剖の結果を飾りなく披瀝してゐるアミエルの魂に惹き附けられるのを感じます。

此箇處は又實にあれ丈の才力を持つてゐた彼が、どうして生前遂に何等見るべき仕事を成し遂げえなかつたのであるかを吾々に語るものとして重要でもありません。誰でもかう云ふ告白を讀んで、無限の憐れみと傷ましさに打たれない人はありますまい。しかも文章家たること、『よき書物』を書くことより外に望みのなかつたアミエル（一八七七年八月三十日参照は、かくして何等文章として後世に傳はるべき著作を公にせずにしたつたに拘らず、彼の心の日々を跡を書きしめた日記が其代りに一個の『よき書物』——しかも或意味に於てユニツクな書物として残ると云ふことは何と云ふ運命の不思議でせう。精神界に於ては爲されたる何物もが失はれはしないことを、此處でも吾々は知ることができます。さう云ふ仕事を彼はしかしたゝ憂鬱と絶望との中でやつたのではありえない。その絶望と憂鬱との背後に、彼が云ふ『虚無』（ナダ）の根柢に、情熱が、情熱に裏付けられた理想が、働いてゐたのでなければならぬ。肯定することが否定であるやうに否定を語ることが肯定であります。此日記に含まれてゐる風景の叙述、文學上の批評の如きは、彼をして永く文學史上に可也高い地位を占めさせるのに十分であると思はれます。近代人の心理を云はゞ新しき魂の一つを、物語る歴史としては殆ど他に比類なき文書であると云つて

も過言ではありません。其等の點で興味ある個處を拔萃することは今私の目的ではありません。私は唯シエレーの甚だしく自由な取捨選擇の下に公にされたアミエルの日記が曾ては二冊本として流布され、ハムフリ！ワード女史の手に成る英譯もそれに基いたものであること、しかし一九二二年になつて彼の誕生百年祭を機會にブーヅイエーに依り漸く全部の面影を傳へるに足るだけの増訂三冊本が出版されるやうになつたことを、悦びを以て附記するに止めませう。アミエル其人に就て、又彼の日記の提供する豊富なる材料の——哲學的思想の上に於てではなく、しかし藝術批評的感想の上に於ける——價値に就ては已に略定評もあることです。